

# 働く男

六牡丹

## 働く男

---

「どうだね、最近の調子は」

「はい。先生のお陰で凄くいいです」

先生と呼ばれる初老の男と、青年が会話をしていた。青年の頭にはヘアバンドのようなものが巻かれている。

「ええと、もう1ヵ月になるのか」

初老の男は手元の資料を眺めた。

「ではまた来週の報告を待っているよ」

青年は「了解です」と言い部屋を出て行った。

研究者である初老の男が開発したのは体が疲れない装置だった。最初は大きくて実用性は無かったが改良に改良を重ね、且つ自然に身に付けられるようにデザインした。青年が着けていたヘアバンドがそれだった。就職したものの体力が無くて仕事が追いつかず、毎日のように上司にガミガミ言われるという青年の相談を受けて開発をした。

「これが普及すれば働き者が急増し経済も豊かになるだろう」

初老の男は青年の様子を記録して資料を閉じた。

青年は見違えるように働いた。定時よりも1時間早く出社して職場の清掃をし、就業時間になると黙々と仕事に取り組み、昼休みには持参した弁当を食べ終わるや仕事の続きに取り組み、就業時間になっても帰らなかった。青年の成績はぐんぐんと上がりガミガミ言われていた上司からは可愛がられるようになった。

その数ヵ月後、青年は無断欠勤をした。これまで無断欠勤などすることがなかったので上司は不審に思い、青年のアパートを訪れるように営業課の部下に命じた。

もうすぐ昼休みになる頃、上司の電話が鳴った。

「どうだ。アパートに行ってみたのか」

「はい。ドアをノックしても返事が無くて鍵が掛かったままなので管理人に連絡をして開けてもらいました」

「彼はいなかったのか」

「いえ、いました。というか...」

部下は口を閉ざした。

「どうした」

「あの、死んでいたんです」

青年の死因は過労によるものだった。何故この体で働いていたのかと医師が首を傾げるほど青年の体は衰えていた。

「最近彼が来なくなったな」

開発室で初老の男は呟いた。

「せっかく眠らなくてもいい装置を開発したのに」

「最近どうも眠れなくて困っているんです。なにかいい方法はありませんか」

睡眠を研究している博士のもとへ男が尋ねてきた。

「様々な快眠方法、快眠グッズ、もう殆ど試しましたがどれも役に立ちませんでした」

博士は「ふむ、ならばアレを試してみるか」と髭をなでると「では夜になったら再度来なさい」と男に言った。

その夜、博士は予定通り再来した男を奥の部屋へ男を案内した。

部屋にはベッド一台置かれており、枕元にはボタンがたくさんついた機械が置かれてあった。

「ここに横になりなさい」

「博士、この機械はなんですか」

「これは脳を極限までリラックスさせる装置だ。まだ研究段階だがそれなりの効果は期待できる」

「そうですか。じゃあ私が研究対象になりましょう」

男は嬉しそうに言った。

「ふむ、非常に助かる。ではまずこれを頭につけなさい」

博士が帽子の骨組みのようなものを渡すと男はそれを被りベッドに横になった。

「ではスイッチをいれるぞ」

博士が機械の電源をいれると中央にあるディスプレイに上下に揺れ動く緑の線が表示された。

「目を閉じて深呼吸を」

男は博士の言われたとおりに目を閉じた。博士が様々なダイヤルを少しずつ捻っていくとディスプレイの線はまっすぐになった。

「これで眠ったはずだ」

博士は試しに男の名を呼んだり軽く肩を揺すってみたが男は目を閉じたままだった。

「6時間ほど眠ればすっきりするだろう」

博士は途中だったレポートを再開しようとしたのだがふとコーヒーが飲みたくなった。毎日研究で夜を明かす博士にとってコーヒーはなくてはならないものだったのだが昨日コーヒーをきらしてしまったことを思い出した。あいにく他に飲むものは無い。博士は仕方なく小銭入れをポケットに入れてコンビニエンスストアへ出かけた。

研究室からコンビニエンスストアまでは徒歩で10分もかからない。橋を渡ればすぐそこだ。古くて狭い橋ではあるが非常に便利なところにあった。

博士は粉末のインスタントコーヒーだけを買うと袋をぶら下げながらトットツと橋を歩いていった。

その時博士の体に衝撃が走った。体は宙を舞い川へ転落した。前方不注意の自動車がぶつかったのだ。その車は一旦停まったものの再び走りだし夜闇に消えていった。

事故の目撃者はおらず、博士の遺体が発見されたのは遥か下流だった。しかし博士は身分を証明するものを持っていなかったため遺体が誰なのか判明するまで日数がかかった。

数ヵ月後、警察が博士の研究室を訪れた。遺体がこの博士であることがようやくわかったのだ。鍵の掛かったドアをこじ開けた警察はある特有の臭いを嗅いだ。

どうやら奥の部屋に臭いの元があるらしい。

「いやあ、今回も視聴率が良いね」

灰色の彼はモニターを眺めて微笑んでいた。

「やはりあの企画は大ヒットでしたね。今後も続けましょう」

隣にいた黒褐色の彼もまたモニターを眺めていた。

「次に行くのは誰にしようか」

「そうですねえ。最近売れ始めているあのコンビ・・・サイフメイサ、なんてどうでしょうか」

「なるほど良いかもしれない。あの2人ならきっと面白いことをやってくれるだろう」

彼らは早速サイフメイサの事務所へ連絡をした。

「はじめまして、サイフメイサです」

ヒョロリと背が高い2人のコンビが灰色の彼のもとへやってきた。

「今回は君達を選ばれた。とりあえず10年間頑張ってきてほしい。面白い番組になることを期待しているよ」

「もちろんですとも。期待しててください。それでは行ってきます」

サイフメイサは渡された撮影用のビデオカメラを持って惑星から飛び立った。瞬く間に消えていくロケットを見送った灰色の彼は自室へ戻りサイフメイサから送られてくる映像の記録を始めた。

彼らが企画したテレビ番組、「遠い惑星サバイバル生活」はその斬新さと時折起きるハプニングの面白さで視聴率がグングンあがっていた。彼らを選んだ惑星は太陽系の星で、そこはサバイバル生活をするのに申し分の無い環境だった。

「みなさーん、目的地が見えてきましたよー」

サイフメイサの片方がロケットの窓の外へカメラを向けると青く美しい惑星が映った。この映像はリアルタイムで配信されており、一切の編集を加えないのが売りだった。

「今回の着陸ポイントも前回と同じところにしていた。そろそろ目標となっているシンボルが見えてくるだろう」

灰色の彼が通信する。

「あ、見えてきました見えてきました」

やがて彼らのロケットは青い惑星へ着陸した。

「ここで10年間すごすのか」

「よし頑張ろうな」

「無事に終えたら我々も大きな絵を残していこうじゃないか」

こうして彼らのサバイバル生活が始まった。

10年後、彼らの生活は大反響を呼び胸を張って帰ることができた。

「おかえり。お疲れ様だったね」

灰色の彼と黒褐色の彼が出迎えた。

「いやあ、結構楽しかったですよ」

「そして君達もまた隋分と大きな絵を残してきたな」

「はい、これまでで一番大きな絵にしましたよ」

2人は自慢げに言った。

「目的地がまた一段と見やすくなったよ。上から見ると凄く賑やかだ」

「次はどんな絵を残してくれるのでしょうかね」

「おいおい、それではまるで絵を描きにあの星へ行っているようじゃないか」

「あ、そうでした。目的はサバイバルでしたね」

灰色の彼と黒褐色の彼がモニターを見ながら会話をしていた。

「さて次は誰にしようか」

「今度はあの5人グループに行かせてみましょう」

## 出来心

---

小さな男の子が公園のブランコで遊んでいる。そばには母親が立っており、時々何か言葉を発してはキャッキヤと騒いでいる。

やがて遊び疲れた男の子はブランコから降りると母親と手を繋いで公園の外へと歩きだしたが、ふと花壇の前で足を止めた。花壇には色とりどりの季節の花が咲いていた。

「お花綺麗だね」

母親が言うと

「きれいだね」

と男の子は返した。

花を見ていた男の子は地面に小さな穴があるのに気がついた。

「あな」

男の子は指差した。母親が「それはアリさんの...」と教えようとした時、男の子は穴を指で押しつぶしてしまった。

その直後である。

空が一瞬で真っ暗になり、何事だと思いう間もなく地球は消滅した。宇宙空間から急に現れた超巨大隕石が猛スピードで地球に衝突したのだった。



正直者は、

---

今回の宝くじは一等二億円だ。まあ一等ではなくても二等でも三等でも良い。いつもは「ふん」と鼻で笑って買わない宝くじだが、買わなければ当たらない。今回は試しにと買ってみようと思いインターネットで色々と調べ、よく当たると評判の宝くじ売場へ行くことにした。購入額は10枚で1000円。庶民の夢が詰まってると思えば300円でも当たれば満足だ。

その評判の宝くじ売場はアーケード街にあるのだが、そこへ行く途中で黒い財布を拾った。周囲は偶然にも閑散としておりこのままくすねても誰に知られることもないだろう。しかし私は交番に届けることにした。バカ正直だと思われるかもしれないが、ネコババは良心が痛む。

スマートフォンで地図を確認するとどうやら交番は宝くじ売場とは反対側の方向にあるらしい。宝くじを売っている場所はもうすぐなので最初に宝くじを買ってから行こうかと思ったのだが、誰かに見られているかもしれないという考えが頭を過ぎり、面倒でも真っ先に交番へ行くことにした。

交番へ財布を届けるとなにかと面倒な手続きがあったが仕方ない。差し出された書類に必要事項を記入して交番を後にした。

宝くじ売場へ着くと5人ほど並んでいた。最後尾の男性の後ろに着き自分の番を待つ。

このアーケード街も歴史を感じるなあなどと辺りを見ながらキョロキョロとして突っ立っていると知らずのうちに列が一人二人と進んでおり、列から少し離れてしまった私の前に中年の女性が割り込んできた。注意しようか迷ったが、こちらにも落ち度があるために声を大にして言いにくい。結局その女性を前に入れて今度はキョロキョロすることなく自分の番を待った。列は滞りなく進み、私のふたつ前の男性の番になった。

「連番で30枚」

男性は言った。

ほほう、この人は連番か。連番の人は前後賞狙いでもある。今回の宝くじは1等と前後賞合わせれば3億円になる。しかし連番であるがために楽しみが減るというのもある。はずれがすぐにわかるからだ。なので私はバラで購入することになっていた。

次、私の前の女性の番である。

「バラで10枚おねがいします」

ふむ、この人もバラで購入か。しかも私が予定しているのと同じ10枚。ちょっとだけ親近感が沸いた。

そして私の番になった。

「バラで10枚お願いします」

私は支払いを終え家に帰ると宝くじの入った袋を神棚に置いた。

当選番号発表日。

私は公式サイトで公開されている番号と手元にある宝くじの番号を合わせてみた。そして何度も何度も見返すことになった。

3等の100万円が当たっていたのだ。しかも2枚も。2等の1億円からはだいぶ桁が減ってしまっているが200万円でも十分嬉しい。300円でも当たればなどと思っていたのが200万円だ。

後日私は宝くじを換金し、200万円を手にする事ができた。

今思えばあの日、財布を拾ってそのまま宝くじ売場へ行っていたらこの200万円を手にする事はできなかつたろう。そしてあの割り込んできた女性に注意をし、私が前に並んでいたら当たりくじを手にする事はできなかつた。やはり神様は正直者に微笑むのだ。私はこれからも正直に生きていこうと思った。

さて、宝くじの3等を幸運にも2つも当てたこの男性。自分の行いに非常に満足しているようなのだが、この男性の前にいた女性が一等二億円を手にした事は知る由もなかつた。

「博士！例の薬が完成したって本当ですか！」

男が息を切らしながら研究室へ駆け込んできた。

「本当だとも。これがそうだ」

博士と呼ばれた男が小さなビンを指差した。中には青く透明な液体が入っている。

「これを飲めば5分後に透明人間になる。ただし効果時間は1時間程度だがな」

「早速飲ませてください。と言いたいところですが、体に害はないのでしょうか」

男は少し不安そうな顔をした。

「大丈夫だ、体に悪影響を及ぼす成分は含まれていない。私自身、何度も試してみたがこの通り元気だ」

博士は胸をポンと叩き自慢げな顔で男を見た。

「なるほど。では安心して飲めますね」

男は薬をゴクリと飲み、効果が現れるまでの間は博士の指示に従いベッドに横たわった。

男の体は徐々に薄くなっていき、5分後には完全に見えなくなった。ベッドの上には男が着ていた服が立体的に横たわっていた。

「君の姿はもう見えないよ。鏡を見てごらん」

博士が机の上にある鏡を指差すとベッドの服が動き机の前に移動した。

「本当だ！姿が見えない！」

次々と服が脱ぎ擦れてられ、男の存在は全くわからなくなった。薬の開発は大成功だった。

「使うのは勝手だが、万引きは駄目だぞ。消えているのは君自身だけなんだから。もし万引きしようとしたら、傍目には君が持っている物がプカプカ浮いているように見えるからね」

「わかってますよ」

見えぬ男の顔がニヤリと笑った気がした。

男はこの薬を使ってまず映画館に忍び込んだ。それからコンサート会場へも忍び込み、果てにはオフィスの女子更衣室へも忍び込んだ。

効果時間が1時間であるために映画を見ている途中で効果が切れてしまうのが問題だった。室内は真っ暗なので誰にもばれることはないといっても、現れる姿は全裸である。男は誰にもばれないようにと願いながら再び薬を飲んでやりすごした。コンサートにおいては客が全員ステージに夢中とはいえ室内にも照明が当たるので効果が切れる前に逃げ出すしか方法はなかった。この男は落語が好きなので寄席へも忍び込んだのだが、姿がない故に思い切って笑うことができず大変だった。また、姿が見えないとはいえ混雑している場所では人とぶつかる可能性が高く、現に何度かぶつかった。その際は相手側が不可解な顔をしただけで済んだのだが、大事になりかねない。歩行者がいなくとも走っている車に轢かれる危険性もある。

男からそれらの問題を聞いた博士は「それならばと」新しい薬の開発に明け暮れた。

やがて薬は完成した。

「今回の薬は透明になるだけではない。大抵の物を通り抜けることができるし自分の声も周囲に聞こえない。前回君が言った問題点を全てクリアしている。しかも効果時間を3時間まで延ばすことに成功した」

男は飛び上がって喜んだ。

「ただし、まだ研究段階なので慎重に使うように」

「はいはい、わかっています」

博士から数回分の薬を受け取った男は鼻歌を歌いながら研究室を出て行った。

薬の効果は博士の言うとおりの大変なものだった。

男は透明になると軽くドアにぶつかってみた。するとスルリとドアを通り抜けてしまったのだ。赤の他人の隣で大きな声を出しても気付かれることもなかった。男はまたもや好き勝手に動き始めた。

男が薬を3度目に使用したとき、予定の時間になっても体が元に戻らないことに気が付いた。

「あれ？まだ消えたままだ」

4時間経っても5時間経っても消えたままの体は戻らなかった。そこで男はふと、「もし体が元に戻らなかったらこれを飲みなさい」と博士に渡されていた薬を思い出した。

その薬をしまっている引き出しを開けようと手を伸ばしたのだが、その手は空を掴んだ。

「しまった！これでは引き出しを開けることができない」

男は慌てて博士の元へ行ったのだがどんなに大声を出しても博士には届かなかった。「ならば文字で！」とペンを掴もうとしても掴めない。男は恐怖に陥った。そしてふと男の傍にいた博士がつぶやいた。

「そういえば彼はどうしているのでしょうか。まさかこの部屋にいたりしてね」

男の声は叫んだが、やはり届かなかった。

## ある小説家の人生と結果

---

小説家を目指している男がいた。彼は小さい頃から読書が好きでいつか自分も物語を書いてみたいと常々に思っていた。高校を卒業した彼はとある中小企業に就職し、その傍らで小説を書いていた。出来上がった小説はコンクールに応募した。大賞を取れば小説家としての大きな一歩を踏み出せるからだ。しかし男の作品はどれも一次審査すら通らず、自信作だったはずの今回もまた落選だった。

「やはり俺には才能がないのか」

彼は落胆した。しかし何度も何度も挑戦して有名になった小説家は多くいる。男は「よし次こそ大賞を取ってやる」と自分に喝をいれた。

翌週、彼は一身上の都合という理由で会社に辞表を出しアパートにこもって小説を書くことに専念した。貯蓄はそれなりにあるので一年くらいは生活していける。僅かであるが退職金が出たのでそのお金で思い切ってパソコンを購入した。

ふと物語が浮かべば文字を打ち、いまひとつ良い具合に展開しなければ消し、また何か浮かべば文字を打つ。

そんな生活を始めて半年経った。

男は未だに何も作品を書き上げることができず苦しんでいた。もう貯蓄は半分になっている。このままでは生活が出来なくなってしまう。そんな焦りとプレッシャーが彼の創造力を鈍らせていた。

「ううむ、何も物語が浮かばない」

自分は結局平凡な人間として人生を過ごしていくのだろうか。こんなつまらない人生など意味があるのだろうか。夢は夢のままなのだろうか。そう思ったとき、彼はひらめいた。

「自分を主人公にしてこれまでの人生を書いてみたらどうだろう」

男は文字を打ち始めた。自分の記憶を探るだけなので文字を打つ手は止まらなかった。所々を脚色してヒーローにしたり、どん底に落としたりして自分の過去の世界を大きく広げていった。

そしてついに彼は物語を書き上げた。これまでにないほどの自信作だった。男は年に一度開催される大きなコンクールに応募することにし、応募規定をしっかりと確認した。プリントアウトした原稿を何度も読み返し推敲を重ね、誤字脱字がないか何度も何度もチェックした。

原稿を出版社へ送った彼は心地よい達成感に包まれた。カレンダーに印をつけた結果発表の日を首を長くして待った。

そしてついにその日を迎えた。

正午に出版社のウェブサイトで結果が発表された。

しかし大賞に彼の名前は無かった。優秀賞や審査員特別賞にも彼の名前は無かった。佳作に選ばれた30作品を目を凝らしてみたがそこにも無かった。

ウェブサイトを閉じた彼の頬には涙が流れていた。

やがて覚悟を決めた彼はパソコンのファイルに保存していた小説のデータを消すことにした。

[このパソコンからデータを完全に削除しますか]

彼は [削除する] をクリックした。

ファイルは一瞬で消えた。そして彼の姿もまた一瞬で消えたのだった。

## キャンドルライト

---

ようやくこの日を迎えた。この日のために集まってくれた親戚や友人達を眺めながら僕は思った。

長い間想い続けていた女性がすぐ隣にいる。本当に自分は幸せだなと感じた。少し緊張した表情で会場を眺めている彼女に目をやると視線を感じたのか彼女も僕を見た。僕が微笑むと少し癖のある見慣れた笑顔を見せた。この笑顔が僕は大好きだ。

「大丈夫？疲れてない？」

少し顔を寄せて尋ねると彼女は笑顔のまま大きく首を振った。

僕の友人達がサプライズとして何かを用意していたらしい。司会役の女性がその事を告げるとそれまで柔らかに点いていた会場の照明がふっと消えて真っ暗になった。

「それではご覧ください」

司会役の女性の声と共に、僕たちが座っている側の会場の両片隅が小さく光った。キャンドルライトだ。その光は次々と増えていき、会場の壁を走るように入場口の方へ伸びていった。会場がどよめく。

両壁を走っていた光は入場口をなぞるように屈折し、中央でぶつかった。その瞬間煌びやかな効果音と共に会場中がまっ白な光に包まれた。会場は歓声であふれ大きな拍手で埋め尽くされた。

「すごい！」

彼女の声が聞こえた。僕はあまりの美しさに言葉が出なかった。

光が消え会場が再び真っ暗になっても拍手は鳴り止まなかったが徐々にその音は減っていき、会場は静かになった。

「では照明をお願いします」

司会役の女性が言うとパッと灯りがついた。

目に入ってきた景色はいつも見慣れた天井だった。

私は考えることしかできない。

しかしここから遠い場所にある媒体が私の考えを受け取り、行動してくれる。媒体からは常に新しい情報が送られ、それを私は記憶する。

私は考えることしかできない。

しかしそれが故に、記憶する力と量に長けている。その結果、私の媒体は幼少の頃から学力が高く、有名なエリート校を首席で卒業し、一流の企業へ就職し、後に国会議員へ出馬し、ついに大統領に就任した。

私は考えることしかできない。

媒体がいる世界では世界戦争の危機にある。世界の経済を握る国々がみな核爆弾を持ち、自国への攻撃に備えている。一発どこかの国がそれを発射したとき、連鎖的にすべての国が発射するだろう。幸運にも私の媒体が治めている国は世界で一番大きく権限力がある。媒体は様々な国と交渉し、世界を戦争の危機から守っている。

私は考えることしかできない。

世界戦争はないものの、多くの国では紛争が絶えない。領土のため、原油のため、食料のために多くの命が奪われる。今日もまた何万もの人が銃弾に倒れ、爆弾に吹き飛ばされた。はるか昔人間は、物を分け合って生きていた。わずかの言葉と身振りで意思を伝え合い、共に生きていた。やがて人間は火を見つけた。火が文明を進め、電気が文明に革命を起こした。

私は考えることしかできない。

みなが生きてために動いていた世界は、いつからか自分の自由のために動くようになっていた。自分の自由のために国民の貧困に目を向けない統治者も現れた。抗う者は殺され、統治者を崇拝する者だけが残された。世界を我が領土にすべく、統治者は武器を持った。

私は考えることしかできない。

この危機を乗り越える術が思い浮かばない。私は間違ったことをしてきたとは思わない。私の前の大統領も間違ったことをしたとは思わない。その前も、その前も、間違っただけではない。この大きな問題は、すべてあの時の火にあるのではないだろうか。

私は考えることしかできない。

今回もまた失敗だった。もう一度やり直そう。

私は考えることしかできない。

私の媒体はボタンを押した。やがて人類は消えるだろう。

私は考えることしかできない。

新たな媒体が現れるまで、私は眠りにつく。